

国の経済が成り立ってきたとも言える。しかし、技術は水と同じように高い所から、より低いところに流れ、伝わっていくのが道理で開発途上国に対する技術支援をブーメラン効果を恐れて回避している、ロケットや人工衛星をつくり・打ち上げる技術ノウハウや原爆の製造技術でさえも、先進国の独占が許されない時代がやって来たことを理解しなければならない。また、グローバル化の波は資源とマーケットの確保に経済大国の最大の戦略がおかれ、国際的な協調もあくまでも国益を優先した上で考える、厳しい時代になつてきたことを痛感する。途上国の経済は先進国の技術的な支援なしには大きく発展しないのではなかろうか。金属加工分野の技術支援の要請は板金プレス加工の工程設計技術、複雑形状プラスチック部品の金型設計技術、機械部品の鋳造方案技術などと要請がより高度なものとなつてきているので、これら専門分野の日本側の技術ポテンシャルをどのように維持、向上させ行くかが最大の課題と考えられ、現地側の導入設備のメンテナンス体制の改善も大きな課題である。



流れのシミュレーション解析



サンルイスボトシのミニプロジェクト



市民との友情を深める会

## ウズベキスタンに於ける人材開発プロジェクト

福田 信一郎(JECK会員)

JICAは1999年に日本センター構想をたて、旧社会主義国の市場経済移行を支援し太い人脈作り及び21世紀人づくり戦略を進めてきた。具体的活動は、

1. 市場経済化の実務人材育成
2. 日本語普及、対日留学等の促進を通じた対日理解促進
3. 両国の国民参加による幅広い交流促進、である。

筆者が2000年4月に応募したウズベキスタン日本人材開発センター(UJC)のビジネスコース(BC)運営指導業務は半年前にスタートしたベトナムに次いで、カザフスタン及びモンゴルのセンターと共に2番目であった。

筆者は嘗て国際機関での勤務経験があり開発途上国での人材育成の重要性を認識し、かつ国際機関特有の権威主義や経済性・効果・効率の甘さをも体験した。このプロジェクトを期待通りに立ち上げ運営するには、筆者が生業としてきたプロジェクトマネジメント手法適用の有効性を訴え、幸い筆者の提案が評価されたのか、多くの応募者の中から採用され、2001年2月から2003年7月まで首都タシケントに於いて、BCの運營業務に従事した。

赴任後、スタッフのリクルート、現地調査やニーズサーベイを実施し、人材育成の現状、受講希望者の発掘などを行い、

1. 学卒若者向け、5ヶ月間のMBAタイプのPMP(Professional Management Program)(全日及び夜間コース)
2. 中間管理者向け、2週間の問題解決型コース
3. 上級管理職、企業経営者及び官吏向け、1日のTop Managementコース

を設計し、立ち上げの作業を開始した。

最初に上記3コースのどれからスタートするかで、大論争があった。しかし、筆者はスタッフの後押しを受け最も困難が予想される上記1のPMPを、失敗すれば罷免を覚悟で最初にスタートすることを決心した。当時タシケントには多くの人材育成機関があり後発の我々が日本の存在感を現地でアピールすること、及び早くマネジメントの手法や知識を身につけ働きたい(2年のMBAコースに比べPMPは5ヶ月間)という若者の期待に応えたい想いが困難なコースを先に立ち上げさせたのである。

それは赴任8ヶ月後のことであった。

幸い日本的経営が評価されていた時期でもありまた現地で評判の良い日本が実施するBCであることや、関係者のメディアや口コミを用いた必死の運動で第1回のPMPに定員の5倍の応募者があり、いずれも甲乙つけがたく人選に苦慮した。

ここで運営について筆者の採った基本方針は、まず、このコースでウズベキスタンの坂本竜馬を育てたいとの想いがあった。当時の大使、中山恭子参議院議員も賛同してくださり、ご支援を戴いた。このためには、1)良い人材のリクルート、2)熱心な講師の採用、及び3)UJCのmissionを理解し、献身的な活動が出来るスタッフの採用であった。関係者のサポートがあり、上記の3つが満足され、PMPスタート後1年でウズベキスタンで最も著名なビジネスコースとして評価され、当時「勉強するならUJCへ」という言葉が流行ったほどである。PMPは昼間部及び夜間部からなり、朝9時から夜10時までシフト制を採用したものの良くてきてくれたと感謝している。

このコースの成功をモスクワ及びカザフスタンで行われた国際会議で発表し高い評価を得、JICAの名を関係者に広めることが出来た。

婦任時PMPは3期が終了し、4期目のリクルートの最中であつた。現在既に12期が終了し3月から始まる第13期受講者のリクルート中である。現在までのPMP卒業生数は600人を超え、各界や起業家として活動し、国の発展に貢献しており、BC設立の所期の目的を達成することが出来た。ここにお世話になつたすべての方々に改めて感謝したい。

